

こころ の 健康

統合失調症について (その6・自閉症との比較)

千葉県医師会 ねもととよみ 根本 豊實 医師

これまで統合失調症について簡単にお話をしてきましたが、今回は最終回となります。

統合失調症は、生物学的な病気の原因がわかっていないため、その病理の把握は、症状や経過などの表に出ている状態の観察からしかできません。そのやや困難な病理の把握には、以前から様々な点を異なる疾患と比較し、検討を加えて接近するという方法がよく用いられてきました。統合失調症は、昔は躁うつ病と比較検討されることが多かったのですが、最近では自閉症と比較されることが多くなりました。今回はこの点を簡単に解説します。

自閉症は、社会性と言語的コミュニケーションの独特な障害を中心症状とする、先天的な疾患と考えられており、注意欠陥多動性障害や学習障害などとともに発達障害を形成する主要な疾患です。注目すべきはその発症率で、昔は1万人に4、5人とされてきましたが、近年診断数が急増し、日本も含めた先進国では1万人に100人から200人と50倍前後増加しました。これは実際に増えているという報告もある一方、発達障害の知識が世間に広まり、特に軽症例に関しては自ら診断して受診するというケースが増えているという事情もあるようです。自閉症では、通常なら生まれもっている「視線を読む能力」や「指差しを理解する能力」などが障害されて、結果的に通常の言語(概念)の習得に困難が生じる事が報告されています。また、これと強く関連して「自分」と「他者」の形成が阻害されて、いわば一つの心しかない世界に住んでいると考えられます。正常なら他の人間の表れの奥には、異なる心があるとするのが常識ですが、自閉症ではこの常識の世界への参入に困難を抱えているのです。

これに対して、統合失調症では、「自分」と「他者」の形成に特に異常はありません。しかし、そこに何らかの不安定性があるようで、思春期以降の発病を契機に「自分」と「他者」の心は混乱し、「自分」の心の底に「他者」の心が侵入したり、「他者」の表れの奥に「自分」の心が出現したりします。このように、自閉症と統合失調症は、一方はこころが一つの世界に住み、他方は自他の心は混乱して出現する世界に住んでいるというように、対照的な病理を持っていると考えられ、この比較は、統合失調症の基本的な病理の把握に役立つ視点と言えます。

